

氏名 竹中 幸史 (たけなか こうじ)

所属	人文学部人文学科 歴史学講座
職名	教授
発令年月日	2016年10月1日
最終学歴	京都大学大学院文学研究科博士後期課程(歴史文化学専攻)研究指導認定退学、博士(文学) [京都大学]
担当授業科目	学部：西洋史入門、西洋史概説、西洋史特殊講義、西洋史史料基礎講読、西洋史史料発展講読、西洋史基礎演習、西洋史発展演習、西洋史卒論基礎演習、西洋史卒論発展演習、必読名著、基礎セミナー他 大学院：人文科学総論、西洋歴史論、西洋歴史論演習
研究活動の概要	竹中先生の研究テーマはおよそ次の3つです。 ① フランス革命期のソシアビリテ(社会的結合、社交関係のこと) このテーマについては、学生の頃から研究してこられたものです。具体的には政治結社の活動や祭典を分析することによって、革命を生き延びた人びとが民主主義社会においていかに政治的主体として目覚めてゆくか(あるいは目覚めないか)を考察されています。最近ではフランス革命後半(1795 - 1799年)の事象に注目しておられます。 ② フランスにおける国民的「記憶」 19世紀になるとフランスは2度の帝政、2度の革命、1度の王政復古と、大変な激動に見舞われます。そうしたなかでフランス革命はいかに「記憶」され、また三色旗やラ・マルセイエーズといった革命の象徴はどのように定着したのか。一方、軍事クーデタによって共和政を終わらせた極悪人であったはずのナポレオンが、なぜ国民的“英雄”の扱いを受けるようになったのか。こうしたフランス市民の歴史認識の変容、「記憶の場」を研究の対象にしておられます。 ③ 場という空間 フランスを旅すると、主要都市にはたいがい大きな広場があります。これらの多くはブルボン朝の支配が安定した17世紀半ば以降に整備され、中心部に国王像などが設置されたのですが、ここには王権による地方統制、文化支配の様子が看取できます。ところが18世紀以降に体制が変化すると、広場の名称変更や王像の撤去、「共和国」像の再設置などが進行します。広場は市民が気軽に集まる場所だからこそ、権力はそこに市民を体制支持に導くメッセージを込めようとするのです。最近では、こうした“広場をめぐる権力のせめぎ合い”に関心を示しておられます。